

第15回 『光と影』 (通算35回)

2006.2.16

本日は『光がなければ影もない』といった内容についてお話しをしてみましょう。

東洋医学に「陰陽」という概念があります。漢方治療の場でも陰陽という用語は用いられますし、陰陽五行説などと呼ばれる定理のような考え方が紹介されることもあります。ご覧になられた方はさぞかし難解だな、という印象をもたれたことでしょう。しかし…。

今までにもご紹介してまいりました東洋医学の用語や概念、それらはいずれも古代人たちが日常生活や日々の営みのなかに見つけたヒントであり、また物事を説明するための術なのです。つまり、本来であれば誰にでも理解できる内容であるということです。

試しに国語辞典をひいてみますと、陰・陽のそれぞれには次のような意味があると書かれています。

陰

- | | | | |
|---------|--------|-------|-------|
| 1) 暗い | 2) くもる | 3) 湿気 | 4) かげ |
| 5) かくれる | 6) 内側 | などなど | |

陽

- | | | | |
|--------|--------|-------|----------|
| 1) 明るい | 2) ひなた | 3) 暖か | 4) 人目につく |
| 5) 積極的 | 6) 外側 | などなど | |

つまり陰と陽とはちょうど反対の関係にあるものであるということです。東洋医学における陰陽とはそれぞれのイメージをいだかせるような物事に対して、いわば形容詞のように陰陽という言葉をあててゆくことをいいます。そしてその上で治療や病態の説明に用いるのです。

例: 水は陰、だから「乾いている」は「陰が足りない」のだから「陰が虚」⇒「陰虚」

例: 熱は陽、だから「冷えている」は「陽が足りない」のだから「陽が虚」⇒「陽虚」

しかし、ここで大切なことは、この陰陽という言葉が元々漢方治療のために生み出された概念なのではなく、もっと日常的な事柄を説明するためのものであるということです。「月が陰なら太陽は陽」とか、「夏が陽なら冬は陰」とか、…。世の中の様々な事柄を陰陽という言葉をかき、そこに比較やバランスの大切さを感じ取るための術としたのです。現代社会を見渡しても、何かが一方に傾き過ぎて混乱が生じたり、それを是正しようとするあまり反対に行き過ぎてしまったり。いくらでもバランスの悪さの例を見つけることはできます。そういうことを考える場合に「陰陽」の発想が役に立つことを忘れてはなりません。その1つの対象がわたしたちの身体なのであって、自然との調和の大切さや自己のなかでのバランスの重要性を説明しようとするのです。そこに陰陽という概念を用いる価値があるのです。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

【本日の内容について、ご確認ください】

桂枝加朮附湯: 桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草、蒼朮、附子

六味丸: 地黄、山薬、山茱萸、茯苓、沢瀉、牡丹皮

八味地黄丸: 地黄、山薬、山茱萸、茯苓、沢瀉、牡丹皮、桂枝、附子

ポイント

■ 補陽と補陰

浅岡俊之
www.asaoka.org

今回からご参加の先生方へ

東洋医学には様々な用語が用いられます。陰陽・虚実・表裏・寒熱、気・血・水、などなど。これらの用語は今では日常的に用いられることは稀なので(医学の世界では、ですが)、始めはどなたでも違和感をお感じになられるはずですよ。

東洋医学の概念は生活のなかから生まれ、そして浸透してきたものです。その生い立ちは決して難解な「テクニカルワード」にあるのではなく、日常的なセンスでの会話や思考にあるのです。ですので、現代人である我々もそのようにして理解するのが一番。決して特殊な用語とか、難解な理論であると受け取ってはなりません。なぜなら、そうしてしまっただけで東洋医学を学んでも、その真意を見過ごすことにつながりかねないからです。

東洋医学用語に限りませんが、言葉というものはそれを使うことが重要なわけではありません。その意味するところを知り、理解し、そしてそこから日々の生活や人生のヒントを見つけ出すことが大切なのです。

本日はご紹介する「陰陽」も、元々わたしたちの日常に当たり前存在するもののなかから得られた概念です。決して特別なものであろうはずもありません。だからこそ価値があるのだし、納得もできるのです。

どうぞ、東洋医学が語らんとしている真意をご理解ください。陰陽、それは決して病気や治療に限った話ではなく、世の中一般の出来事を理解するための尺度なのです。